

古事記入門

吉田敦彦『図解 眠れなくなるほど面白い古事記』
瀧音能之『地図でスッと頭に入る古事記と日本書紀』

天地開闢

ことあま
別天つ神

神代七代

イザナギ

イザナミ

国産み・神産み・黄泉の国

アマテラス

スサノオ

タケミカヅチ

オオクニヌシ

国譲り

ニニギ

イワレビコ
(¹神武天皇)

¹²景行天皇

¹³成務天皇

ヤマトタケル

¹⁶仁徳天皇

³³推古天皇

古事記とは

- 『日本最古の歴史書』と一般的にいわれている
- 721年（奈良時代）完成
 - 編纂の勅令を出したのは第14代天武天皇 681年頃
 - 奈良時代は710年からとされている
- 天皇家による統治の正当性を示すために編纂された
- 編纂者は稗田阿礼（ひえだのあれ）と太安万侶（おあのやすまろ）
 - 稗田阿礼は、『帝紀』（天皇の系譜）と『旧辞』（天皇家周辺の伝承集）を暗記した。
 - 太安万侶は、稗田阿礼が暗誦した物語を字に起こした。
- 全体のうち、神話が1／3を占める
 - 『日本書紀』における神話の割合が1/15

神代七代（かみよななよ）

- 別天つ神の後に、2柱の独神と、5対（10柱）の男女一対の神が生まれた。
- この男女一対の神の中で最後に生まれたのが、イザナギ・イザナミである。
- この2柱と5対の神をあわせて「神代七代（かみよななよ）」と呼ぶ
- 初めに生まれた2柱の独神もまたすぐに身を隠した

国産み・神産み

神々から葦原の中つ国に国を作れと命じられたイザナギとイザナミは、矛を使い海をかき混ぜ、その矛から滴った塩を固めてオノゴロ島をつくった。
オノゴロ島に降り立った二柱は、契りを交わして交わり、次々と島を生んだ。

国土を生み終えたイザナギとイザナミは、続いて次々と神を産んだ。
その途中で火の神・ヒノヤギハヤオノカミを産んだときに、イザナミは大やけどを負い、大変苦しんだ。
イザナミが苦しんでいる間に数々の神が生まれたが、ついには死んで黄泉の国へ行ってしまった。
妻を失った悲しみから、イザナギはヒノヤギハヤオノカミの首を跳ねた。この時に岩場に飛び散った血からさらに数々の神が生まれた。

アマテラス

イザナギに天の統治を任された。日本神話の最高神であり、天皇家の祖先の神とされる。
追放されたスサノオに対し一旦高天の原にいる許しを出した。
高天の原に滞在中のスサノオは、迷惑行動を繰り返した。
ついに迷惑行動で侍女が死んでしまい、嫌気がさしたアマテラスは天の岩屋戸（あまのいわやど）に鎖かした。
天の岩屋戸からアマテラスを出させるため、神々は岩屋戸の前で祭りを催した。
岩屋戸から出たアマテラスは、スサノオを天から追放した。
この時に、三種の神器のうちの2つ 八咫鏡（やたのかがみ）と、八咫瓊（やたのくさぎ）が作られる。

タケミカヅチ

高天の原では、「葦原の中つ国の管理は、アマテラスの子にさせるべきだ」という論調になった。しかし、中つ国では現在、オオクニヌシをはじめとした国つ神によって支配されている。そこで、中つ国の平定が高天の原の課題となっていた。
先に何度か使いを出したものの、失敗が続いていた。最後に派遣されたのがタケミカヅチである。

ニニギ

葦原の中つ国の平定を待っている間に、アマテラスの孫が生まれた。
タケミカヅチが平定を報告しに戻った後、実際の指導者としてアマテラスの孫であるニニギが葦原の中つ国の高千穂（宮崎県）に降り立った。
ニニギは現地で美しいコノハナサクヤヒメを見染めるが、同時に親から、姉のイワナガヒメも嫁として贈られた。しかしイワナガヒメの見た目を好ましく思わなかったニニギは彼女だけを親元に送り返してしまう。
実は、コノハナサクヤヒメは花々のような繁栄を、イワナガヒメは岩のように長い命をもたらすものだった。だが、イワナガヒメのみを送り返してしまったことで、今後ニニギ以降の子孫は永遠の命を持たなくなったという。
ニニギはついに中つ国に降り立つ際、アマテラスから三種の神器（勾玉・鏡・剣）を与えられた。ついでに鏡はアマテラスが祭るように言っており、現在は三重県の伊勢神宮にて祭っている。

神武天皇

イワレビコという名で生まれた御子で、第四子として生まれている。国を治めるには日向から出て大和に向かう方がよいと兄に提案し、実際に平定に向かった。
途中、兄は現地の豪族によって弑されるが、その後ヤタガラスの導きにより大和に到達し、初代神武天皇として即位する。
即位したのは紀元前660年2月11日とされている。

下の巻

第16代天皇から第33代天皇まで記述されている。
しかし第24代仁賢天皇から第33代推古天皇までは、特に事績が記されておらず、欠史十代という。
第16代仁徳天皇は、渡来人の技術を借りて治水工事や新田の開墾、国民が貧しい間の免税などを行い、聖方（ひじりみかど）と呼ばれた。陵墓の古墳は日本最大の前方高円墳となっている。
欠史十代は古事記に記述があるわけではないが、一方で同時期には作られた『日本書紀』に記述がある。特に第33代推古天皇は日本初の女帝で、摂政に聖徳太子を就けたことが記されている。

天地開闢

別天つ神（ことあまつかみ）

天地は一つのものだった。
やがて天と地が離れ、天は高天の原と呼ばれるようになる。
この時に5柱の神が次々と生まれたが、すべてすぐに身を隠した。
性別の区別のない独神（ひとりかみ）
天地が分かれたときに生まれたこの5柱を特に「別天つ神（ことあまつかみ）」という

黄泉の国

イザナギは黄泉の国へ行ってしまったイザナミを迎えに行くことにした。
イザナミは迎えを喜びつつも、「簡単には帰れない。黄泉の神に相談してくる。その間決して自分の姿を見てはいけない。」といい、奥に行った。
待ちきれなくなったイザナギは果てりをもってイザナミの姿を見た。
その姿を見たイザナギは逃げ出した。イザナミは怒って後を追ったが、ついには入口を大岩でふさがれ追えなくなった。
このとき、イザナミは「ひどい。一日に1000人以上の人間を喰い殺してやる」といい、それに対してイザナギが「ではこちらは一日に1500人の産屋を建てる」といった。この時の言葉がきっかけで人には死があるようになったとされている。

アマテラスとスサノオの誕生

黄泉の国から帰ってきたイザナギが、穢れを落とすために川で禊ぎを行った。
この禊ぎの時に数々の神が生まれている。
最後に顔を洗った際、左目を洗ったときにアマテラス、右目を洗ったときにツクヨミ、鼻を洗ったときにスサノオが生まれる。
イザナギはこの3柱の誕生を特に喜び、それぞれに高天の原、夜の国、海原の統治を命じた。
しかしスサノオは海に行かず、母（イザナミ）に会いたいといいはじめた。怒ったイザナギは、スサノオを葦原の中つ国から追放した。

スサノオ

天からも追放されたスサノオは、再び葦原の中つ国の出雲に降り立った。
するとそこには中つ国で暮らしている神々が困っていた。
話を聞くと、村の娘が次々と化け物やマタノオロチに食べられているとのことだった。スサノオはこの話をきいたあと、ヤマタノオロチを退治する。
退治したお礼として、スサノオは中つ国で生き残っていた娘トヨタマヒメを嫁にもらい、子供を設けた。
ヤマタノオロチを退治したとき、その体内から三種の神器の一つ 天叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）が取り出された。

オオクニヌシ

スサノオの子孫。八十神（やそがみ）という腹違いの大量の兄弟がいる。最初はオオアナムチノカミという名前だった。
・因幡の白兔を助けて名前を「オオクニヌシ」に改名する
・八十神たちに根之堅洲国（スサノオのいる地底世界）まで追いつめられる
・スサノオの娘スセリビメと駆け落ちし、根之堅洲国から脱出する
と、複数のエピソードを経て、最終的にイザナギ以来止まっていた国づくりを再開する。

国譲り

タケミカヅチはオオクニヌシに葦原の中つ国をアマテラスの子に譲るべきだという。
オオクニヌシは「息子に聞いてください」と返事した。実際に二人の息子は同じ国にいて、片方の息子は承認した。しかし、もう一人の息子は承認せず、タケミカヅチに力比べを挑み、その結果で決めることになった。結果、タケミカヅチが圧倒的に勝利した。
勝負に負けたオオクニヌシの息子が承認したため、オオクニヌシ本人も国をアマテラスの子に譲ることに同意した。代わりにオオクニヌシは、隠棲するための巨大な御殿を出雲に建ててほしいと要求した。（出雲大社の興り）
21世紀に残る神社のうち、「神宮」としている神社はアマテラスやその関係者・関係物を主祭神としている。
一方で「大社」としている神社はスサノオやオオクニヌシの関係者や関係物を主祭神としている。

上の巻そのほか

ニニギの子の世代の海幸彦（うみさちひこ・ホデリ）と山幸彦（やまさちひこ・ホオリ）が中心の話ですが、上の巻に記された内容である。
山幸彦がこの後、初代神武天皇の祖父となる神である。
一方、海幸彦は古代九州南部に栄えていた隼人族の祖先とされる。
海幸彦と山幸彦のエピソードとして、お互いの仕事道具を交換したことがきっかけとなり兄弟げんかとなり、最終的に山幸彦が海幸彦を制する話がある。

ヤマトタケル

第12代景行天皇の80人の子供のうちの一人。最初はオウスという名前だった。
兄が食事の場に出てこないことを天皇から解決するように頼まれるが、これを暴力的な方法で解決してしまったことをつけに、全国各地の反乱部族の鎮圧に回され続けることになる。
東方（関東・東北方面）遠征に出されることになったとき、伊勢にいた叔母より天叢雲剣を与えてもらった。その後平定を済ませると、尾張にいる妻の元に剣を置いて、山の神を打ち取りに行った。
しかし山の神から逆に殺され、ついに能褒野（現三重県亀山市）にて息絶えた。
死後、その魂は白い鳥へと姿を変え飛び立ったという。
ヤマトタケルの死後、妻のミヤズヒメは遺品となった剣を尾張の熱田で祭った。これが愛知県にある現在の熱田神宮の興りである。

中の巻

下の巻